

西鶴論

(人に答ふる書に擬す)

紛々たるかな西鶴の是非、或時はわけの聖と
 たへられ、或時は文盲にして書法を知らずと
 朝られ、此の人、肚裏に一字の文學なしと卑む
 ものあれば、好色の書を作りて活計の謀と
 したる罪人と誹るものあり。『日本文学史』の著
 者は西鶴を評して「深遠なる學識あるにあらず、
 高雅なる思想を有するにあらず、従うて其の作
 何れも猥雜卑陋にして後世識者の譏を免れず」と
 といひ、「好色五人女」の翻刻者は「さはれ西鶴
 は一箇の詩腦を著へしが故に開巻の些事を見る
 も凡そ眼に觸るゝもの總て自家の詩材に供へし
 かと、彼は小説家にも物語作者にもあらねば、
 元より彼の手腕をもて京傳或は馬琴と比べべ
 くもあらず、彼が述作は足利時代の小説を一轉
 し、分明に一種の浮世草紙派なるものを起し、小
 説世界の一紀源を開きしかど、悉く端物にし
 て廣く人間を觀察せしむ一會の一部に過ぎず、
 殊に性情を面白く寫せしむ其變化流轉する所以
 を詳かにせず、深く世態と人情との關係する

處を説明せしに非ず、又最高の理想あつて是を
 人事に寓せしにもあらず。されば小説家として
 是を尊ぶこと頗る疑はしく京傳馬琴以上にあ
 るべくも思はれず、思はれざるも彼が價値は毫
 も減せざるなり」といひ、また「西鶴と芭蕉は以
 て元祿の社會を代表すべし。共に厭世家にして
 高く超然たりしが、西鶴は放縱に流れし故に、
 唯俳諧に満足せずして其奇才を驅て卑猥なる社
 會を毫も假借する處なく有りのまゝに描寫して
 獨り樂み獨り笑ひ、一般の我が文學者と同じく
 社會的觀念は微塵もなく、破天荒の浮世草紙
 は偏更色道の隱微に渡りきといへり。其の他
 彼れを樂天的といふものあり、彼れの理想を粹
 の一字に留むべしと論ずるものあり、知らず、西
 鶴の眞價畢竟幾何ぞ。案ずるに貴論實さるゝ
 の主意は以上の如くに候ふべし。本より西鶴を
 一個人としてそが人品を論ぜんは、彼れの生涯
 を明めたる後の事、且つ道德上より見ると文學
 上より見るとは、其の間多少の區別もあること

に候へば、茲には社會的に西鶴をあげつらふ
 を止め、旨と文學上より彼れが價値につきて立
 論いたすべく候。中にも

浮世草紙の西鶴

是れ彼れの本面目に御座候。御存知の如く
 西鶴の浮世草紙に筆を染めしは、五代將軍常
 憲公の二年、天和二年に出でし「好色一代男」
 を始と致し、越えて二年、貞享元年「好色二
 代男」成り、同じ三年「好色一代女」「好色五
 人女」「本朝二十不孝」成り候へど、翌貞享四
 年には浮世草紙の面目一變して「男色大鑑」「武
 道傳來記」「武家義理物語」等となり、相尋ぎて
 『日本永代藏』『新可笑記』『本朝櫻蔭比事』『胸算
 用』のたぐひ見はれ申候。今假に天和二年よ
 り元祿六年西鶴の死せしまで凡そ十二年間を彼
 れの浮世草紙時代といたさば、件の變化を界と
 して文學者西鶴の一代はおのづから前後の兩
 期に分れ申すべしか、即ち前期は「一代男」「二
 代男」を経て「一代女」「五人女」に其の圓熟
 の極を示し、後期は「武道傳來記」「武家義理物
 語」「永代藏」「胸算用」などにて代表せらるゝ義
 に御座候。試みに之れを色分けいたさば、無
 論一は好色氣質を素とし、他は武家氣質、商人

氣質を素とするものと申すべく、而して「男色大鑑」は一種の異彩として其の間に挟まれ、兩者を糊塗するが如き觀有之候。この他西鶴の死後世に出でしものにては、『俗つれ』、『萬の文反古』など或は偽作なるべしと論ずる向も有之、且つ思想露骨、文調淺俗のふしもなきにあらねば、偽作ならぬまでも之れによりて西鶴の眞價を窺はんは如何と存候。さて西鶴のいかに人生を觀せしかを尋ぬるに先ちて辯ずべきは

西鶴が浮世草紙

の性質に御座候。概して申さば浮世草紙は今日いふ所の小説に候はず、小話或は短き記事文といはれ相當り候はんか、固より此處にて、小説といへるに嚴正の定義を下さんとは候はねど、假にも小説と名け得ん限は、脚色を匠みて事柄を面白く敘し候ふか、性情の發展人間の運命を描き候ふか、何れといたすも單に一場の出来事、一時の心ざまを記述するのみにては、飽き足りぬ心地いたし申候。例へば『二代男』『三代男』『一代女』など、表面は主人公ありて首尾一貫するに似たれど、其實主人公を因として事柄を之れに凑合せ

しむといふにも候はねば、さりとして毎段別に一の首尾結構を具ふと定まれるにも候はず、申さば切れぐの記事を無秩序に綴り合はせたるに過ぎず、「男色大鑑」「二十不孝」以下の作に至りては、全く小話集の性質を顯し申し候。

ひとり『五人女』のみは、五種の短篇を集めたものなれど、每篇略と小説の態をなし、西鶴物中にての異色と見え申し候。要するに浮世草紙の性質は小話集にて、西鶴は人間の全運命を觀じて之れを描破せるよりも、寧ろ人間の一部の運命を描破して眞に達せるものと申すべく候。語を更へて申さば所謂氣質を緯として雑

多の事件を織りはへたるものにて、西鶴の作は何れか氣質物に候はざらん、とりわけ好色氣質其の主なる部分を占め、武家氣質、商人氣質など之れに亞ぎ候ふべし、只後の其噴、自笑等の如く特に親父氣質、娘氣質と取り出でて申さざりしのみ。まづ『一代男』に就きて御覽あるべし、七歳より六十歳の老人となるまでに三千七百四十二人の女に戯れ、七百二十五人の少年を弄びきといふ世之介が好色の行狀五十四條は其の事柄こそさま／＼なれ、畢竟同轍に候はずや、作者の自白せる如く、世之介生れ落つるより黠しきこと十歳の多と申すべく

女是非なく、御心にかなふやうにもてなし、其後小箱をさがし芥子人形、おきあがり、雲雀笛を取そるへ、これ／＼大事に物ながら、襟に何指かるべき、御なぐさみにたてまつると、此れにてたらせども、嬉しさうなる氣色もなく、頓て子を持つたらば之れに泣きやます物にもなるぞかし、此のおきあがり其方に惚れたかして倒けかゝるといひさま、賤枕してなほおとなしきところあり

といへる九歳の少年は、やがて、あれこそ譯知りの世之介さまと持て囃され、廣き世界の遊女町残らず眺め廻れる當年の世之介と何の擇ぶ所か候はん。例を擧げて論ずるまでもなく、好色道の極意、粹の一字が權化して世之介となりたるものと申さは事足るべく候。既に粹といへる一性情の權化なるからに之れを火に投ずるも、水に委ぬるも變化の妙なく、五十四條の複雑なる事柄は、一條にも納むべく五十四條にも別つべく虚靈なる人間の精神が一貫の特性を具しなから尙五十四條の變化をなすとは趣を別にす次第に御座候。思ふに西鶴が落筆當時の用意も恐らく人間の性情を根本より掛破せんなど申す高尙のものにあらずして、只そが好色

界に發現したる結果を面白く寫すにありしもの
 と存じ候、他語にて申さば、西鶴は『一代男』
 の主人公を描かんとせるにあらざり、むしろ世之
 介といへる一箇の紳客を觀察者の地位に立
 て、其が周圍に蟄集し來る好色界の現象を觀
 察せしめたるもの、而して世之介はやがて西鶴
 自身かと存ぜられ候、勿論西鶴の平生を齋
 にせざれば、此等悉く彼の實驗譚なりや否
 やは明めかね候へど、その中幾分は確に聞
 親實歴の事柄に材料を取りたるものと見え申
 候。さて斯の如く世之介は單に粹の權化とも
 申すべき言はゞ變通虚靈の性なき人物にして其
 はまた西鶴の倅なりといさば、一見西鶴の
 心はしかく狹隘にして單調なるものかとの御
 疑も生ずべし、されどこは怪むに足らず候、
 世之介を西鶴の作りたる完き人間もしくは西鶴
 自身の全體と申さばこそ惡しけれ、萬般の好色
 的現象を一に統べんため總て是等を包容して之
 が軸となるに堪ふべき圓滿の好色家すなはち
 理想的好色氣質を捏成化したるものといは
 ばよろしかるべく候。西鶴の理想を器に譬ふ
 れば、之に好色を盛りたるが粹にして世之介は
 これなるべく、更に盛るに武道を以てすれば武
 家氣質となり、財事を以てすれば商人氣質と相

成るべし。さればまた一方より言ふときは武家
 氣質も理想なれば、好色氣質も理想にて、何れ
 も西鶴の一部なれど全體には候はず、西鶴を掩
 ふの理想は一段大なるものならざるべからずと
 存じ候。隨うて彼れの間諷は彼れの氣質と
 別なること申すまでもなし、次に『一代女』は
 た『一代男』と同調にて、女主人公が十一歳よ
 り六十五歳までのいたづらを書き連ねたるもの
 に御座候。但し主人公の女性なるだけ、此方
 の事柄及びそが觀察の彼方との別趣なること
 二者相違の第一點に御座候。又種々の好色事
 件を統轄すべき極致、彼方にては粹又は大通
 など申す男性的のものに歸し、此方にては遊女
 氣質とも申すべき複雑なる女性的のものに歸す
 こと、二者相違の第二點に御座候。此等を
 除き候はゞ、『一代男』も『一代女』も共に作者が
 好色氣質といへる中央點に立ちて周圍の好色
 界を眺むるものなること、相同じく候。兩書
 の性質既にかく候、上は之れによりて一面西
 鶴の好色的極致を窺ふとともに、他面にはそ
 を軸として群り來る事柄につき彼れが人間觀
 の片々をも尋ね難からずと存じ候、『五人女』
 に至りて西鶴の本領は最も圓滿に見はれたりと
 申すべきか、この作『一代男』『一代女』の如く

切れぬなる事柄を強ひて結びつけし難なく、
 每篇主人公と境遇と、因縁兼ね到りて個人の性
 情おもひくゞの發展を遂ぐる所、五篇の短小説
 と申すべし、幾分か今日所謂小説の體面を具へ
 申し候。作者みづからは此の書にも得意の好
 色の二字を冠し候へど、實は夫の支離滅裂の
 事柄を狹隘なる好色氣質の埒にて結び廻した
 る如き『一代男』『一代女』などと異なりて覺束
 なきながらも人間の全局其の裡に彫靡せられ
 申し候。西鶴が小説家としての技術及び彼れ
 の纏まりたる人間觀を示すは此の書を第一と致
 すべきか、さればこゝにては、西鶴が色道の極
 致とせるものにしてまた幾分か彼れの倅なる
 好色氣質を説明いたすに『一代男』『一代女』
 を以てし小説家として人間の運命を描ける彼れ
 を觀察いたすに主として『五人女』を以てすべ
 く候。其の他女色界を去りながらも猶好色の
 味忘れられず、顧みて武道に恰好なる男色に指
 を染め、之れをもて武士氣質を彩れるもの、男
 色大鑑』に候はずや。西鶴の前期と後期とを
 點綴すとは此の意に御座候。この書、體裁は
 一章一事の純然たる小説にて、其中より抽
 象いたさば、一種の武家氣質を得べく候。更
 に進みて後期の談作につきて申さば、『武道傳來

記「武家義理物語」の武士氣質に於ける、『日本
永代藏』胸算用の商人氣質に於ける、何れも
漸く色道とは相遠かり候へど、略とおなじ型と
御承知下さるべし。而して武士氣質は義理を
いのちと致し、商人氣質は財貨集散の秘訣遣
り繰り懸け引きの利巧を眼目と致すとは申せ、
此れらはさまで複雑ならぬものに候へば、取り
出でて論ずるまでも候まじきか。尤も義理と
申すには説あり。西鶴の描ける義理は後の作家
が勸懲の窓より觀せし義理とかはりて、極め
て純潔のものと存せられ候。その故は、後
世の義理は眞吾の底より流れ出づるものに候は
で、只々世間體とか外見とか申す點より割り出
し候もの、即ち形式的人爲的のものに過ぎず、
申さば輕薄なる義理に候へど西鶴のは然らず、
眞に我が本然の性より煥發するもの西鶴の義
理にして、彼れの之れを寫し候や、單調子なが
らも靈氣淋漓、深く人心に通徹する所有之候。
蓋しかゝる相違は之れを時勢の上にも認めがた
からず、西鶴の義理はまた

元祿的

と申すも不可なるべしと存じ候。徳川氏
のはじめ文運未だ盛ならず、雲の如く林の如

き參河武士が削痕斑々の腕骨を撫して、一番槍
の功名談に餘念なかりし世は、人々眞率意を
着けて正義を銜はざるも動作おのづから義理を
離れず候ひつれど、元祿の一關を越えてのち、
文漸く質に勝ち淫靡薄敗の餘弊は人を虚偽虚
飾の奴隷と化せしめ候ひぬ、あはれ武道の精英
は發して元祿武士と匂ひしまゝ名残を此に留め
て日に月に銷磨し行き候。割と何時頃を境と
は定めかね候へど、およそ天和元祿の際を徳川
氏治平の頂上といたさば、此の時代はまさに、
質をもて優れる慶長元和の氣象、寛文延寶の
頃を経て文の衣を着し文質調和の實を示せる
ものと申すべく、人皆泰平にして殆ど無缺とも
見えけん現實の世界に満足して他を思はず、世
を擧げて醉生夢死はいはゆる「花に飛て夢よりち
きに死なんかな」の境に彷徨へる有様に候ひき。
されば一方より見る時は此のうち既に不健全の
萌芽を含み候こと勿論なれど、かゝるは歴史
が示す必然の數にして、圓熟の極はやがて腐敗
の端なること、有限の人世には免れがたき所に
御座候。元祿は圓熟の極なり、その後は腐敗
の端なり、圓熟と腐敗と相接するのゆゑをもて
圓熟を誹議せんとするは燎くを恐れて火を慶す
の愚と擇び候はんや。天和元祿の社會は固よ

り淫逸華奢に候ひき、しかも淫逸といひ華奢と
いふの性質おのづから後世のものより異なりて、
眞率なり、一徹なり、眞面目なり、天和元祿の人
の花に戯るゝは、花に戯ると申すよりも、花に
狂すと申すべく、彼等の月に浮かるゝは月に浮
かると申すよりも月に淫すと申すべく、凡そ其
の境に入るときは即ち滿腔の熱誠を捧げて顧み
ざること當時の狀態と存じ候。要するに天和
元祿の社會は情熱的、狂氣的とも評し候はん
か、比較を英のエリザベス時代に取るものある
も此のゆゑに候。今より見れば、丹前姿に六
方を踏みきといふ元祿の伊達男は狂に似たれ
ど、しかも彼等は濫面つくりて之れをなしまに
候はずや。はたエリザベス朝の紳士淑女は靴尖を
延ばして膝に餘り、帽子に帆を張り二三重に
及べるものありしに候はずや。而して此等の稚
意却りて可憐の心地するは畢竟眞心流露して
虚偽ならず輕薄ならざるに因り候。この至情
一轉して他方に向ふときは、道義金鐵の元祿的
武士氣質を成すも怪むに足らず候。天地の美
は常に一元を姿とし人心の本然はた二元を惡む
の理を會得候は、元祿の社會其の物の甚だ惡
むべきにあらぬを知るに難からずと存じ候。
元祿以後の社會はすなはち然らず、彼等は表面

に義理を説きながら内心必しもこれに應ぜず、もしくは衷心私に憚る所ありながら煩惱の大制し盡されずして遂に蕩淫身を敗る、何れか輕浮の心根に候はざらん、元祿以上にありては、世間の知ると知らざるとに論なく自家の信する所に従ひて義理をも行ひ淫逸にも耽る社會的眼光を以ていたさば不善に候べし、しかも尙その自己のために自己の信する所を行ふの形式は美に候。元祿以下にありて義理も世間のために行ひ、淫逸も世間のために抑ふ、時に結果か善に似たるもの有之も、所詮醜態を免れず候。元祿を境としてかく義理の性質を分ち、さて西鶴を件の潮ごかひに立てるものと致さば、彼れの振りかへりて寫せるは勿論元祿以上のものに候。而して其の善惡ともに満身の熱誠を捧げて一往直前、他を顧みざるは、之れを元祿的と申すべく、西鶴の作全部に通徹するはこの風に御座候。以下章を改めて西鶴の好色氣質及び彼れの間人觀に論及すべく候。

好色氣質

好色氣質に新説なし、たゞ少しく巨細に論究いたすまでに御座候、之れを内分して粹人氣質、遊女氣質の二といたすこと前に申上げた

が如し。或は粹人氣質など申す事、用語未熟の嫌有之やも計られねど、其はしばらく御見ゆるし下さるべく候。まづ粹人氣質は如何。春のや氏がひとむかし前の戲文の一節に

(前略) 世に粹といふことあれども其傳來も鮮かならねば其本義もまた定かならず或は所謂通をいふ或は今いふ意氣なる者を指す九大夫が由良どんを呼んで粹めくといふは通人めといふ心なるべく母親の粹な捌といへるも亦同様なる心なるべししかして粹な姿といひ粹な調子の爪躰などいへば今の所謂いきな姿いきな調子を指したるに似たり曲亭翁嘗ていはく「萬事に心きゝたる者を垂といふ由は拍案驚奇に見えたり水滸傳に垂覺とあるも同意なり國俗は粹とかくもあり垂は元明の頃よりの俗語ならんか又案ずるに垂は來の俗省來は垂の本字にて乖と異なり」といへり云々

また同じく

(前略) 故に粹には三原素あり曰く「酌情曰く寛恕曰く自敬即ち是なり此三原素を并有して鍊熟其妙に入りたる者は是之を大通と云ふ大通は恬憍無爲大聖のごとく大智識の如し得て名狀すべくもあらず老子の曰く

大徳は徳とせずこゝをもつて徳ありと大通もまた然り外に求むる所なくして自ら守る是大通の形といふべし世人或は粹と通とを混じ或は花柳界の事に明き者を以て直に通となす者あり蓋し誤れりといふべし通は萬事に通するをいふ花柳事情に通するものは單に老練の煙客なるのみいかでか通といふべけんや如何となれば花柳事情に通するもの未だかならずしも粹ならず粹なるも亦必しも花柳事情に通せざるも可なればなり

といへる、片々たる戲文字に候へど、粹、通など申すもの義は略々相通じ申候。たゞし通の本義はしかく廣しといたさんも、其を花柳界に應用したるものやがて粹かとも存せられ候へば、こゝには粹と通とを分たず、むしろ粹を花柳界の事とし之れと意氣とを對せしめて立言いたすべく候。春のや氏の説の外、鶴外氏は曾て

意氣の我を以て彼の領地を犯すものなることは復た疑ふべからず、唯その人を凌ぐや體面を傷らず、唯その我を以て彼の領地を犯すや趣味を損せず、意氣と云ひ粹と云ひまた通といふ、其秘論蓋しこゝにあり

といひまた

世に大通と稱するものあり、説をなすものは通より大通に至り、意氣より大通に至るといふ。其誤は平淡を以て初階の極なりとするものにおなじ、絢爛豈平淡の前階級ならむや、意氣豈大通の前階級ならむや、大通は始より人を凌ぐ心なし。大通は意氣にあらず、通にあらず、野暮にして偏屈ならざるをいふなり、上品なるをいふなり、高等なるをいふなり。

といはれたれどこれ亦精しからず、餘事は如く措き好色界にて粹と申すは、言はゞ斯の道の極致にして、鴨外氏のいはゆる通意氣など申す境を通り抜け優に大通の域に入りたるもの候。蓋し鴨外氏の通もしくは意氣とは、着意して通を利かし粹を銜ふもの、したがひて着意の底には利己辨他の一念潛むを免れず、所謂通の通くさく、味噌の味噌くさき物に候はんか。眞の粹、大通の通はさに候はじ、野暮はたしかに未だ意氣ならざるの名、意氣は着意して粹ならんとするの名、粹は乃ち野暮と意氣との上に選出したるものと存じ候。語を換へて申さば好色道にての野暮とは、未だ意氣の何ものなるか知らず、隨ひて意氣ならん意をも有せざ

る心さまに御座候、之れを作文に譬ふれば、

些も鉸鍊修飾を加へざる稚き文章の如きものに候、若しくは粉脂を解せざる垂髻乙女の無邪氣なるに比べ候はんか、要するに其の道にかけては猶無縁地において全く無心無意識なるものと申すべし。しかもやうやく見聞の廣まり行き候とともに心や、動きはじめて全盛の羨むべきを思ふに至るは人心の自然に候、斯くして陰に陽に虚實を盡して全盛あたりを拂ふの用意に汲々たるを意氣の時代とは名け候、文章にてはまさに絢爛綺靡、醉のために辭を聯ぬるものに相當すべく、鞅轡の下、春風泣くの少女が長眉畫くべく粧奮親むべきを知れるたぐひにて御座候、すなはち、意識して極致を眞似るの状態にして、凡そ何の社會たるを問はず、それんの道に入る第一歩は常にかゝるべしと存候。更に粹に至りては此等の兩端を没入して意識無意識の外に優遊するものと申すべく候、又は其のあとを尋ねれば、意識を道ふの極、意識の盡さざるものあるを曉りて不用意自然の我れに還れるものとも見なされ候はん、又は意識の表にては平々淡淡々他の野暮漢の云爲する所に異ならざるも、しかも應對おのづから節に合して、櫻に霞める春の月、紗に裏め

る夜光の壁の含蓄限りなきが如きものに候はん。要は着意して奇を求めざるも奇自然に會し、斯の道に於て他より尊ばれ、さもあるべしと思はる、諸性質期せずして一身に染まるにあり、經驗を極め差別を悉して其を自己の體とい

たすにあり、意氣の中より着意の分子、我執の座を清め去りて無意不識なる姿趣の復び野暮と似寄るにあり、野暮と意氣とを没するにあり、自他の城壁を抜くにあり、本然の我れに還るにあり、同情にあり。眞の同情に滯るものは、野暮來るとき野暮をも容れ、意氣來るとき意氣をも容れ、偏執なく端微なく、事々すべて無碍なるのさかひに出入す、之れ粹の奥義にしてまた大通の實諦かと存じ候。さてかく形式の上にては一わたり粹人氣質の何物なるかを精明いたし候へど、これのみにては物色いまだ定かならず、いでや粹とは如何なるものに候やらん、取りわけ西鶴の眼に映せし所はいかに。
生まれながら聖なるものに候はゞ知らず、凡下のものにありては、何事によらず、修行を積み精進を重ねたる後にこそ始めて即身即法の三昧地に達し得るものに候へば、粹と通とはた此の數には漏れ候はじ。而してその修行地に入るの第一歩は、粹を極めたる人のおのづか

「二代女」に
今世の世のよねのすきぬる風俗は、千筋染の
黄無垢の上に黒羽二重の紋付襦袢かに、帯
は龍門の薄かば、羽織は紅とびにして八丈
紬のひつかへし、素足に藁草履はきすて、座
敷つきゆたかに脇差すこし拔出し扇つかひ
して袖口より風を入れしほしありて手水に
立ち石鉢に水はありとも改めて水をかへさ
せて静に口中などあらひ禿いひやりて供の
いの持たせ置きし白き奉書包の煙草とり
よせ呑むなど、のべの鼻紙膝近く置きてか
りそめにつかひすて引舟女郎を招きよせ手
を少し借りたいたと袂より内に入れさせけん
べけにすたる灸をかへせ太鼓女郎に加賀
節のぞみて謡うてひくをそれを心をとめ
て聞かず小歌の半に末社に咄しかけ昨日の
利布刈の脇は高安はたしと褒め此のぢうの
古歌を大納言どのお尋ね申したが拙者聞
いた通り在原の元方に極まりたなどいたり

物語二つ三つ、かしらにそゝらずして萬事
おとしつけて居たる客には太夫氣をのまれ
て我れと身にたしなみ心の出来て其の男す
るほどの事賢く見えて恐ろしく位とる事は
脇になりて機嫌を取る事になりぬ。
と申すは意氣の上乗なるもの、強ち身に粹
骨なきも態度の表だけは粹の形を模し得たるも
のと申すべく候。單に嬌容氣質のみにつき
てはいざ、此のあたりを其の頂點といたすべく
や。一面より申せば、「二代男」「二代女」「二
代男」「三代男」など、要するにかゝる心意氣
を體する淺薄なる人物と、やゝ複雑なる假城氣
質と相觸れて生ずる事件を寫せるものに外なら
ず、まことの粹は一段高きものと存じ候。西
鶴はいかにしてまことの粹の消息を傳へ候ひし
か、「二代男」五十四條の何れを見候も、表
面に現れたるは意氣全盛の事柄のみにて、まだ
まだ粹の彼岸は遙しと申すべし。さほれ一人壇
上に立ちて眺すとき、眼下に集まり來るもの
已れより矮きを怪み候はんや、作者が一段高
き處より知らずく、主人公の上に放つ光明に
こそ「二代男」の粹は留め申すべけれ。世之介
十八歳まで部屋住の色ぐるひ、十九歳勘當せら
れて凡そ色界の貧しきかたを流り盡し、三十四

歳にして歸參、一心のまゝ此銀つかへと母親氣
を通して二萬五千貫目確に渡しけるに、何時
なりとも御用次第に太夫さまへ進じ申すべし日
ごろの願今なり思ふものをうけ出し又は名高
き女郎残らず此の時買はいでは弓矢八幡百二十
の末社どもを集めて大大大盡の豪奢の緒を開
き候。までは、さしたる事もなければ、之れよ
り後の世之介は、全盛以外に分明に一種の光
彩を發し申候。例へば或時は、今日は譚知り
の世之介さまなれば何隠すべき各々の料にはと
申すうちに夜更けて介さまのお越と申す太夫只
今の首尾を語れば其れこそ女郎の本意なれわれ
見捨てじと其の夜俄に揉み立て吉野を受出し
或時は「女」の心入を驚き様子を聞けば隠れも
なき人の御息女なり請出して直に丹波へ送り、
「戀は五」の思ひやり自然に身に備はり人の男
を取らるゝ事此のちうの仕出しなり此の心入
のいやな所はさらく戀にあらず紋日缺かさぬ
程の大じんにはばかり其仕方ぞかしと噂せらる
る悪女郎には「四五度も忍び會うてから、正月
の入用御無心の書簡拜しまゐらせ時分がら忝
くぞんじ候。金を出して女郎狂ひ住れば御存じ
の通り此方に好き申候太夫と久々申しかは
し候貴様よりは只のやうに御申越候程に戀

（11）

の暇のなき身なれども折節合力にあうて進じ申候餘人を御かせざるべし口貨の金子御貸しなされ候は肝いり申すべく候」と眞向より責めつくる類、一方より見れば所謂俠にも通ふべき振舞と申さんか。勿論俠と申にも等ありて、市井の俠は、大俠の根本より正義を體とするに異なりとは申せ、俠と粹とは畢竟同じ水脈の別なる暗井かと存じ候、大にしては大和魂など申すも矢張り同呼吸に候べし。所詮粹は好色界の俠骨、好色界の大和魂なり、つぶさに色道の坎坷、人情の曲折を經歷して酸きも甘きも噛み分けたる上、其を鹽梅するに濁なき同情の淨味を以てするものに候。尋常の場合には、何事にまれ己れ專にせんとすれば他を厭するに至ること避けがたき結果に候へどひとり粹は然らず、粹は此の際に處して能く自己を調和し、己れ遊興を盡すも他を犯さず、隨うて他をして己れをも犯さしめず、却りて己れの欲する所直に他の樂ぶ所に合するものに御座候。哲學者の口氣を假りて申さば、好色界全體の目的とする所と、其内の一員の目的とする所と、所謂平等想と差別想との相即せるおもむき之れ粹に候。粹を銜ふの徒は粹りて以て他を厭するの具と致せど、粹其の

物は、他より尊仰せらるゝの性をこそ有すれ、他を厭せんとはいたさず候。

以上粹の辨稍々贅に似たれど、然らずと存じ候、其のゆゑは後の作者の粹を描き候や、多くは外形に泥みて、命脈の繋がる所を觀ず、西鶴の死後二十年ならずして世に出で、善く西鶴の骨を得たりと稱せらるゝ八文字舎の『傾城禁短氣』すら既に色道の粹を解して落空一點の雲氣あるを免れず候、況や其の以下の作者をや。『傾城禁短氣』に

法師さらんせかざしてあくる四ツ過に來られ何を騒がしうするぞ山伏などの前で行くものにあらず我れらが粹の祕密にて此の狂氣をなほして見すべしと座敷へ通り給へば眼すわり息さし荒く美しき姿はなくて涙じき體相、鐵漿つけし齒を鳴らしてさまざまの謔言聞くに身の毛もよだつばかり法師は少しも騒がず煙草盆ひきよせ心靜かに一服煙らせおどしつけて是れ八雲、所に居て多くの客に採まれてもまだ粹といふ人を見しられぬと見えたりなせ打ちわつて我が身には深い言ひ交はせの男あればおなきけに其れに添はせてたまはれと包まず心底をあかし我が手前を首尾ようひまは貫はれ

ずして騒がしい狂言をはじめ飽かれてひまを取らうとはそりや前方なる若手の男にして見せたがよい管この古法師はそんなちよろい手をくふ事にあらずねんごろな男は座にあるか客にあるかありやうに白狀めされ出しおくれになつて長狂言せらるゝと其方が身は買切ておいた物なれば死なるまで座敷牢に押こめ置き月日の光を見せぬがなんと雲八返事はどうぢやと星をくはされ覺えず足手が一所へじんじとよつてほろりと涙をこぼし何事も今までのおなきけに御免ありて御機嫌ようおいとま下さるべし深間の男と申すはいたづらものにもあらざ我れゆゑに代々の家を潰して淺ましくなられし丹波橋の少六といふ大臣に添はいでは心中立たず様子は是れにと少六文を懐より出だし涙片手に見せければ見るまでもなし外に心ある女を不便がるはらうのわれてある煙管で煙草のむやうなもので煙が傍へもれて我が口の慰にはならず其方ゆゑ身代つづしたる男を忍ぶは情の最上即ち今より暇をやるに二念なくひまをやられし法師の柳き天晴至極の譯知りと今につたへてわらうは言はず

とある、何條心からの粹に候べき。化性を見抜ける法師の眼力は凄まじいほどなれど、我れ粹顔の手捌きは輕薄とや申さん。まこと不便の心あらば、始より何にも言はずにひまやるこそ粹の極意に候はめ、若し又奸計憎しと思はゞ飽くまでも懲らすが眞の人情に候はずや、何れともつかぬ鼠色は、必竟下地に名開利己のごりあればに候べし。此等は未だ意氣の範域を脱せざるものにて、味ひ來れ、色ばかり酔に似たる直し酒のひりりと舌に障る心地いたし候。此のきはを超して、酔手酔の妙境に入れるは獨り西鶴あるのみ、西鶴が好色氣質の貴きはこのゆゑに候。兩刀手拵んでは元祿武士となり、抜き額に六方踏みては男匠造となり、腰纏萬貫狹斜に豪放しては粹大通となれるもの、これ豈一代に燦爛たりし元祿の花に候はずや。爾來徳川のながれ淵瀾うつろひ、逝く水杳然春を載せ去りて回らず、我等は只々西鶴の描破せる所によりて其の一端を想望いたすのみに御座候。

次は遊女氣質の説に候。總じて西鶴の好色氣質を寫し候や、女性の方に密にして男性の氣に疎なるの傾有之候。こは作者が觀察の自然にも由るべけれど、また實際嬌客氣質の

みにては、さまで多趣なるものならぬにも由り候べし、これに反して吳郎を送り越客を迎へ、朝夕境遇の變に處し、一人の心もて萬人の心を操る傾城の氣質は勢、複雜ならざるを得ざる義と存じ候。さて「京の女郎に江戸の張を持たせ大坂の揚屋で會はゞ此の上何かあるべき」と「二代男」の好みもさることにて、西鶴の寫せる傾城はおのづから江戸と上方との二色に分れ申候。『一代男』に

(前略) 秋まで残る螢を數つみて禿に遣はし蚊帳の内に飛ばして水草の花桶入れて心の涼しきやうなして都の人の野とや見からんと(中略) 假にもさもしきこといはず可愛きまゝに人のほしがる物は是ぞと巾着にあるほど打明けて物數四十ばかり包みて袖に投げ入れば取敢へず夜も明けて別れさまに旅の道心者の志うけたきといふ彼の女郎袖の包金を其まゝとらせける

といへる、作者の意は由緒ある身の上を示すにあれど、却りてこれ儂にやさしき遊女の心意氣とや申さん。同じく茲に吉原の名物吉田といへる口舌の上手あり(中略) 萬賢きこと思の外なる山の手さる御方殊更不便がらせ給ひ數々忝き

御しなし否といはれず外をやめて指に疵などつけてまことの心になつて御いとしきも増すとさきさる太夫を戀ひ初め吉田の退き端を色々仕かけ給へども一つも憎むべき事あらず或幕方に小柄屋の小兵衛ばかり召連れられ何によらず今日に限りは難儀を申かけ手をよくのきて遊をかへるぞ急げと清十郎方に行きて太夫に會ひてそゝより横を行けばはや合點して少しも氣やぶらず常の酒振り重ね飲みになつて無理を看になすぞかし(中略) 花も火ともす時分になつて太夫勝手へたちさまに廊下を半すぎて取はづされて其の音に疑なし世之介も小兵衛も横手を打つて面白の春邊やな天晴口説の本たて重ねて出たらば座敷が臭うて居られぬといはう、いや兩人共に鼻塞きてあの方からあらためるときに今日よきにほひを嘆ぎに來たと申せ之れにきはめて待てども出でずよもや出らぬ所でないと大笑して見るに衣裳仕替へて櫻一本持ちながら立出づるより二人目をつけて居るに最前尾をこきたる板敷まで來て其所にて心を着け障子を明けて疊の上へ廻らるゝこそ一代の大事こゝなれ小兵衛も聊爾申してはとしばし之

れを黙りぬ世之介も二の足を踏みてかの板敷歩めども鳴らざりしされども出し遅れてゐる中に吉田方より申し出して此のちの御仕方總じてよめぬ事のみ始より飽かるゝまでとの御傳へ成程今日切りに飽きました御見も今より後はと申し捨て表の見世に出て、犬にさんたさせて遊ばるゝこそ少しは心憎けれ

大人しき態度、利發なる取り捌き、善きかたより申す傾城の心がけは此の邊に候べし。此には假に之れを傾城の上方氣質と名づく、江戸氣質の張り強きものと照り合うて一段の風情有之候。『二代男』に太夫高橋の意氣地を敘して

それ程急な人には會うて面白からずと喜右衛門方に戻りぬ七左方より呼び立つれ共歸らず世之介も戀は互と思ひ太夫を諷め是非行けと申せば今日に限つて日本の神ぞ、行かぬと申すよく、分別を極めよもや先にも此のまゝは措かじ掴みに來る時腰半分切つてやつて「頭此方に置くがと申すいかにも覺悟と世之介にひかせて膝枕してさても命はと投げばし聞いて居られぬ所ぞと尾張の大盡刀拔きながら切つてかゝれど目

も遣らずして聲も振はず唄ひけるめいめい取付き板女扱へども聞かず兩揚屋町中袴着て兩方の詫こと入り亂れて親方かけつけ今日は尾張のお客へも世之介殿へも賣らぬとて高橋がたぶさを取つて宿に歸るそれにも飽かず世之介様さらばといふこそ心強き女此の男あやかりものぞかしといひ太夫小紫の豪奢と依氣とを記して

紫さまお一つまのれと暴くおさへて襟かから膝くだり打ちこぼしたんと氣の毒がる顔つきをかし太夫苦しからぬと座をたちて行水取れと湯殿に入り取前の衣裳つき少しも變らず肌は白綾子中は紅鹿子のひつかへし上は淺黄八丈の八たんがけ召しかへ

られける又上方女郎のせぬ事なり(中略)世之介重ねてたづねければ様子見るに少し足らぬ人を賤にして遣はしけるとさながら見えまますによつて先さまの人憎さも憎しあんな男に逢うてとらしましたといふといへる、さては「二代女」の主人公、己れに敵するものには飽くまで悍に、己れに與するものには飽くまで情深き一種の氣象、「此の男嫌うて振るにはあらずかしらに粹顔をせらるゝによつて此方からもむつかしく仕掛」くる

まけじ魂、正しく町の髪結らしく思はるゝ供の男が全盛顔の憎きに一旦は振られたれど、其の男の優しさに心利きかけし途端「大臣の聲して、夜の明くるに程近し、われは先へ歸れ、髪結ふ人も待ちかねんと何の遠慮もなく起されし之れを聞くと又こゝろざし替り先に見立てし職の人なればかさねて淨名の出づることをうたてく其の通りに起きわかれぬる「情より名聞」

の念、およそ是れらを江戸女郎のいのちといったし候はゞ、上方氣質と江戸氣質と、相通する節も候へど、概して彼方はたしなみ深く利發に、此方は意氣地、名聞を最後の行留まりといたす。藤なみの細く長う風に靡くを執ねしと見候はゞ、雪折竹の雪に一夜の宿をたにしむは無情とも

見え候はん、されど亦細く長う續くは情に深入りせぬ故にて、太く短く一夜に折るゝものこそなか／＼に熱情とも申すべく候へ。外に「いかなる粹もいやとはいはぬ遊女の手練、一客からのつけ次第にして作る「遊女の威、遊女の薄情、遊女の莫連、いまさら例を擧げて論ずるにも及ばずと存じ候。要するに、「一代女」の生涯は即ち遊女氣質の始終にして、上に論ぜし諸性質は其が根じめとなるもの一斑に候。されは遊女氣質の粹人氣質と異なるは、一は女

性だけに我れといふ城郭を胸に帯へ、絶えず其を振りかへり見るの風あれど、他は同情の面より此城郭を脱却し、時に放鳥として本来平等の天地に遊ぶを得るの點に候。縦令しか意識せざるまでも偏狹は女性に常に候へば、審美上に所謂同情忘我等の境には長く停まるを得ず、動々もすれば我れの身上に立ち還らんとする傾有之候。意氣地といひ、名聞といひ、たしなみといひ、利發といひ、何れか此の我執の影に候はざらん。粹は此處を通り抜けたるものにして、粹人氣質と遊女氣質との相違はやがて男性と女性との差別と申して可然候。

好色論の終に申添ふべきは粹、傾城などすべて好色氣質を體とするものと、眞の戀との逆行する一事に候。『五人女』は眞の戀を描かんとするが故に好色の範圍を逸し、『一代女』は好色を寫せるが故に其の戀も眞の戀となり申さず、此の關係は次章西鶴の人生觀を論ずるくだりにて細述いたすべく候。

西鶴の人間觀

人間觀、人生觀など申すこと、此の頃の流行語にて何人も口にする所に候へど、其の本義はさる簡易のものに候はず、近松が心中物の

あはれを寫したるの故をもて彼れを厭世詩人といひ、西鶴が好色界の快樂を描きたる故をもて彼れを樂世詩人といふの類は勿論據なき説に候。本來は人間を何と解し現世相を如何さまに觀すべきかと尋ぬる前に、先づ人生の果して解せせらるべきものなりや否やを論じ、兼ねて知識の性質を明め、造化の祕密は約そ何分通りまで人智の思量をゆるすものなるかを研究致したるのち、人生觀の厭世といひ樂世といふが如き感情的のものに分る、所以を説くが至當の順序に候へど、煩はしければ他日に譲り、此には直に西鶴の人間を觀せし次第を論及いたすべく候。

西鶴が作の原來小説にあらざして短き記事文なる由は既に申上候、隨ひて作者の理想を加へて結構せるもの少く多くは俗にいはゆる寫實に候。されど一方より申すときは却りて頗る理想派に近き點もなきにあらず、『一代男』『一代女』など、全體より見るときは即ちこれに候、其ゆゑは此等の作の表にては、人生は全く好色氣質の獨舞臺にして何程濶淫を極むるも社會的制裁とか周囲の係累とか申すことは殆どなく好色者流の理想郷も欺くやと思はる、有様に候へば也、すなはち個々の事柄は寫

實なりといたすも、全局の上よりいふときは實際にあるまじき世界に候へば也。『一代男』『一代女』の描ける所は好色といふ目安より割り出せる一種の理想的社會にしてまた西鶴が好色の窓より觀せる人生の極致に候。さもあらばあれは彼れが人生觀の一部のみ、之れを以て全西鶴を掩はんとするは偏事に候べし、夫の西鶴を譯の聖といひ又は高上の理想なき野人といふが如きは、貴ぶも賤むも、ともにこの間

の消息を會得せざるに由るものと存じ候、或は西鶴の何故にしかく不健全なる理想世間を不健全と知りつ、描きしかと諷る者も候はんか、そは戲作者の本意を餘りに重く見たる論と申すべし。昔時は戲作者の筆をとり候や、まづ念頭に浮かぶは讀者を娛ましめんの一事にあり。『一代男』『一代女』の成れる、はた此の目的にしたがへるに外ならず候。されば西鶴のはじめより人生に對する己れの感情を歌はんとせるにあらざるは申すに及ばず、彼れは人生の圓滿を夢想して之れを髣髴せんとせるにも候はず、否、圓滿を髣髴せんと致したれど、其の圓滿は人生の圓滿にあらずして歡樂の圓滿に候ひしなり、就中強大の勢力ある色欲的歡樂の圓滿に候ひしなり。而して西鶴の之れを據ふに至

りしは、彼れの時勢と彼れの地位との所以にし
て、猶馬琴が勸懲の眼鏡により仁義世界の圓
満を想望せるがごときものに候。たゞ馬琴は
一途道念の満足を得んと欲して煩惱の念を拒斥
し、之れを以て人生の圓滿と心得候へど、西
鶴は然らず、西鶴が色慾の満足をもて直に人生
の圓滿と觀ぜしにあらざるは、「一代女」「五人
女」などの中に勸懲の口氣を帯べる節少から
ぬを見て知らるべく候、殊に自恣自由なる
「一代女」を讀み卒へたる眼を「五人女」に移す
ときは此の事實最も著く見えすき申候。
「五人女」は即ち西鶴の觀ぜし人間の全相なる
からに、其の中なるは、色も戀も、「一代女」と
異なり、極めて窮屈にして煩惱の傍に常に何
物かの看守するが如き心地いたし申候、例へ
ば等しく肉慾の戀を寫し候も、「一代女」にあ
りては青天白日誰れ憚る所なきに引きかへ、
「五人女」にありては、お夏と清十郎、お仙と長
左衛門、おさんと茂右衛門、お七と吉三郎、何
れも其の戀密事の性を有せるたぐひ、若しくは
「世に神ありむく、あり隠してもしるべし人お
そるべきは此の道なり」あしき事はのがれずあ
なおそろしの世や等の評語を以てせるなど、
明に西鶴が掛ける人間の煩惱一偏に非ざりし

を證するに候はずや。「八犬傳」は其の偏狹な
る不健全なる道義界を以て人生を掩はんとする
が故に、結果は娛樂よりも驚嘆を主とする
に至りたれど、「一代男」「一代女」は娛樂を主と
して驚嘆を求めず、是れ前者の勤々もすれば説
理に終らんとする所以後者の知らずく、美術の
背景に觸れ得る所以に候。近松は乃ち能く美
術の本旨の娛樂にあるを忘れざると共に其の娛
樂の單に煩惱に媚び感充たすにあらざるを
知り、人間の全相を活寫して始より同情の娛
樂に訴へんとせるものに候。佛の批評家テー
ンが曾てミルトンの驚嘆、シェークスピアの創
造、スキフットの打破、バイロンの挑戦、スペン
サーの夢想を並稱せるに做ひて上の三家を品騷
致さば、馬琴は驚嘆するを好み、近松は同感す
るを好み、西鶴は娛樂するを好みきとも申さん
か。要するに元祿の社會にありて西鶴が娛樂の
頂點を好し色界に求めしは怪むに足らず、一步
を進めて無意識のうちに審美の域に參せしは彼
れの偉なる所以に候。西鶴の詩人としての技
倆は彼れに取りては寧ろ無意識的に候、但し
美術の成るはすべて無意識と意識との兩面の
作用によるものとも見らるべくハルトマンの
無意識的概念によりて能く部分を全に統理

し渾成し、同じく無意識の所産なる自然體
と比肩するを得るに至るは天才なり(中略)
此のゆゑにセリング及び其の流派の人々は
一切の美術的作業には意識無意識の兩作
用の不斷錯綜して相助け相濟するを要す
と認けり
といへるも此の理に候へど、此は西鶴の場合
に意識無意識と申すとは別に、直接に美を目
的とし美術のために美術を憐むものにつきて
の事に候。即ち美を成せんと意識して書を
點し丹を施せども、これのみにては未だ美なら
ず、此の上は美趣の横溢し來るは別に無意識の
作用によりれとの義に候。近松の如きは之に
候べし。他に勸語を直接の目的とする馬琴
の如き、娛樂を直接の目的とする西鶴の如き、
感慨を遣るを直接の目的とする詩歌辭賦の如
きも有之候て、此は其の直接の目的より更
に審美的同情といふが如き間接の目的に移るの
手数を要し候。西鶴を無意識と申すは此の際
にて、彼れは意識内にては單に娛樂又勸語と
いへる淺俗なる目的に停まりたれど、無意不識
の間に高尚なる審美的同情を目的とするに至
りたるものと存じ候。約言すれば西鶴の浮世
草紙を作る趣意はたゞ面しるをかくし讀まし

めんといふにありたれど、何時か人間の真相を
 描破して同情に訴ふるの呼吸を默會したるも
 と申すべし。『二代女』には月々ながらもこ
 の種影鋭く見れ、『五人女』には稍々含蓄の
 意をなして圓滿に顯れ申候。或は西鶴の意
 ことさらに社會の浮世を暴露して此れを刺るに
 ありきといひ、或は西鶴冷に世相を觀じて
 獨り筆にし獨り笑めるのみといふが如きは、恐
 らくは聖海上人が社前の獅子のたぐひかと存
 じ候。斯く西鶴の悟入は無意識に近かりきと
 いへども、されども悟入は悟入にて其の此處に
 到れる天才の效は没すべくも候はず、若し西
 鶴が好みて不健全なる世界の歡樂を題目とせ
 るに罪あらば、そは肉體の快樂と精神の快樂
 との調和し圓熟せる醉生夢死の社會の全體に
 涉れる罪にして西鶴は社會の兒たりしに過ぎ
 ず候。

西鶴の人生觀を論ずるはやがて『五人女』を
 評するも同じ事に候、まづ大體の點より申さ
 んに、『五人女』の動因も『一代男』『一代女』の
 動因も等しく色情なれど、『二代男』『一代女』
 には只々色慾ありて戀愛なし、眞の戀愛は『五
 人女』にはじまり申候、之れ明に西鶴が
 『五人女』に一頓歩をなせし證にて、好色に執

する限は戀愛に筆を着くるの餘地なかりしこと
 當然に候。好色と戀愛とは一方に於て相類
 し他方に於て相背くものにて、精しく申さば好
 色も我れを中心とし、戀愛も我れを中心とし、
 兩者差別見に立脚する點に於ては同一に候へ
 ど、また好色の我れは全く我れ一人なり、戀愛
 の我れは我れと我が愛する人とを合したるや、
 廣き我れなるの相違有之候。此の相違こそ好
 色と戀愛とを背馳せしむる根本にして、好色は
 我れに不利なるものすべてを握し候へど、戀
 愛は戀人の爲にのみは我れの不利をも顧みず、
 多淫浮薄は好色のいのちにして眞意獻身は戀愛
 の面目と存じ候、二者の併立せざるは此れに
 て相知れ申すべし。『五人女』に好色の二字を
 冠せしは單に市らんためか、はた好色戀愛の
 別などには無心なりしためか、知りがたく候へ
 ど、實際の上にて正しく西鶴は『一代女』と『五
 人女』との間に一頓悟いたし候。而して頓悟
 して好色と戀愛との別を辨へ、戀愛の本性を
 描破し、到底戀愛の、道念の綱絛以外に獨立す
 るを得ざる所以を示せしもの、『五人女』の心中
 悲劇に候。

總じて古今心中物の精粹は近松の世話淨瑠
 璃に鐘まれりと申候へど、其の發端は西鶴の

『五人女』にあらんと存じ候。心中物とは必
 竟戀愛といへる一種の煩惱と、義理とか世間と
 かいへる道念と、即ち哲學者のいはゆる差別と
 平等との衝突に基くものにて、何故に衝突の
 此世にあるかは姑く別問題といたすも、本來萬
 物存在の大原理は件の兩端の調和にあり、之
 れに正反對なる衝突は存在すべからざるもの
 即ち自滅すべきものたり、心中悲劇とは此の衝
 突の調和するを得ずして遂に自滅するものに外
 ならず、一切の悲劇は此の原則に依りて生ずる
 ものに候。ただ此に注意すべきは斯く心中悲
 劇のみが盛に我國最大詩人の手に描かれたる所
 以に候、勿論シェークスピアにも『ロメオ、エ
 ンド、ジュリエット』『アントニー、エンド、クレ
 オパトラ』以下心中悲劇に近きものなきに候は
 ねど、其の趣も異なり、且つ我が國ほど多か
 らず。『ロメオ、エンド、ジュリエット』のみは其
 の社會の我が國のに似たりしたため稍々我が心中
 物と同調にして近松よりもむしろ西鶴に近似せ
 る節有之候、蓋し後に論ずるが如く、西鶴の
 作はすべて元祿を寫し候へば、南方伊太利を寫
 して批評家をして

當に事柄のみならず語句の形までも南方よ
 り來れるを見る、其の抒情的音節、其の盲

情熱、其の殷豊なる活氣を見、燦爛たる想像を見、放膽なる措辭を見て誰れか伊太利を想はざるものあらん。

といはしめたる「ロメオ、エント、ジュリエット」の西鶴に似たるも無理ならぬ義に候はんか。さて立ちかへりて案するに、心中悲劇の我が國に行はれしは東洋の社會の性質に由来せしもの候はんか、西洋にては蚤く個人といふ思想發生して、差別を重ざるの風行はれ候ひしより、社會を統制し行く平等すなはち道念もさまで差別に酷ならず、奮に酷ならざるのみならず、兎もすれば差別の方跋扈して、政治に宗教に哲學文學美術に、善惡ともに差別の勝てるより來るもの多き傾候ひき。此に於てや、差別見に立つ戀愛の如きも、一舉一動道念に掣肘せらるゝの累なく知りて神聖視せらるゝまでに相成り申候。東洋は之れに反して古より萬事平等を先とするの傾向強く、隨つて道義の如きも差別的個人的の所業を醜遇するの嫌あるを免れず、萬國史家が亞洲國民の特質を擧げて個人之感識薄く自由の想念に乏しなど申すは口惜しけれども致しかたなき事に候。これ我が國にて戀愛の動々もすれば義理と衝突して心中悲劇を醸す所以に候べし、西洋の戀愛の何

處となく白晝公然の趣あるに引きかへ、東洋の戀愛の多く祕事隱密の性あるもゆゑある事に候。或は東洋の戀の肉感に流れ易きを識るものも候へど、こは西洋ととも同轍にて、永く精神上の戀にのみ停留するは寧ろ變例に候、詩人の好みて精神上の戀愛を寫すは之れを榮光ならしめんために強ち戀愛の肉感に終るを榮むる譯は候はず、精神の作用はやがて肉體の作用にして體、心罪竟は二致なく、愛の極は必ず肉體の觸接に終るべきこと心理學の證する所に候。但し實際世間の上にては詩歌美術の上にては肉感を前驅として愛の跡を模するものも賤むべきは勿論に候。

心中悲劇の由来以上のごとしといひし、さて等しく此の地盤に立てる近松、西鶴兩家の殊なる所を考ふるに、まづ目に留まり候は、非案を結ぶべき最後の破裂、すなはち主人公の滅亡のさまの、彼れ此れ著く相違することに候。單に此く申し候のみにては些々たる表面の事柄のやうに思ひ做されんも計りがたく候へど、決して然らず、其の裏面の意味はたしかに兩家の人間觀の相違といふことに候。近松の情死は「曾根崎心中」「天の網鳥」を首とし多く男女の主人公が現世の羈約に堪へ得ずして厭離穢

土欣求淨土の念に驅られ、相携へて自滅する心中悲劇の態を見候へど、西鶴にありては、現世の羈約、煩は煩なれども、之れが爲に直に厭欣の一念に驅られみづから殞滅の淵に赴くといふことなし、西鶴の人間は斯かる場合に處しても猶現世を見捨てんとは致さず、動今もすれば知りて平等旨を破り、道義の綱を滑りても、煩惱の怨を遣うて現世にながへんとす、此をもて必然の結果として他人の手に運られ承ながらに死地に就くもの比々是れに候。設ひ一時は來世を樂ぶの氣分となることあらんも、其は刹那の出來心にして、根柢を叩けば何處までもこの世を捨てて他界に快樂を求めんの覺悟なく、會々自殺せんとすれば他の手に囚られたる絶體絕命の場合のみなること、おなつ清十郎もおせん、長左衛門もおさん、茂右衛門もお七も言三郎も皆同様に候。凡そ煩惱と道念、差別と平等とが一旦衝突の端を啓き候上は特別の事情によりて之れを調和する喜劇、例へば伊達染手綱「夕霧阿波鳴渡」などの外は、主人公の滅亡は必定免れざるものにして滅亡の模様三種ありと存じ候、一は飽までも差別に執して平等の法に抗せんとするため遂に社會の手に強迫せられて死するものにて、西鶴の人

間は此のかたに傾けるものに候、二は一に反し平等の前に傾伏して差別の欲を捨て形骸ほどは残せど有餘の涅槃に入りしも同然、情あり熱ある世間の存在を亡じて白眼世を見るの人間となるものにて、馬琴の人間は往々之れに近づき候、三は差別の欲も捨てられず、されりとて平等の法をも破り得ず、開又閉、遂に自滅の途に就くものにて、近松の人間は之れに外ならず候。近松にありては「難波土産」に「某が憂はみな義理をもつばらとす」と申せし如く常に差別と平等、煩惱と道念とを并べ掲げて彼れに五分、此れに五分の重さを持たせ候へど西鶴にありては差別のかた七八分を占め、やゝもすれば批評家の眼に映じけんシエクスピアの人間に如く、人間の本相は煩惱我、煩惱狂にあるかと疑はれ申候、同一社會を寫しながら、近松と西鶴と其の觀せし心中物の人物のかくの如く相違いたすは何故に候べきか、蓋しこれ前に申し述べたる、近松の意識的と西鶴の無意識的との、また一を理想的ならしめ他を寫實的ならしめ、一をして良を先とせしめ他をして實を先とせしめたるに由るものと存じ候。審に申せば近松は現實世間の人間の皆々として歡樂に耽るの外、念なきを見、而して其の終に自

滅に就くのみ至なるを見て、差別我、煩惱我の傍常に平等、道念の看守するものなかるべからざるを察し、且つ此の兩端、時により處によりて互に消長はあれど古今東西に通じて觀るときは兩々端峙して何れを重しとも定め難く、衝突するの已むべからざるものたるを曉り、此の人生不朽の真相を描破して詩人の本分を完うせんといたせしものに候、すなはち現實の世相は如何あらんも、之れを醇化して眞に近からしめ以て一段明に天の人間を作れる本意即ち造化の極致即ち天の理想を發揮せんとせる者之れ近松に候、近松もし西鶴に比して高き者あらば正に此の點に候べし、彼れの「大まかなる所あるが絆局人の愛する種子とはなるなり」と申せしは、善く其の理想的なりし趣意を表し申候、西鶴は之れと異なりて現實の世相を現實のままに觀じ候ひぬ、現實の世相とは如何なる者に候ひしぞ、曰く社會の組織圓熟して差別平等一語に歸し人々現世の外をおもはず、打ち見たる所天地は現實の生活、差別我的動作に盡きたらんが如く、無邊に流行する平等の大法力には夢にだに想及せざりし者、これ元祿以上の世相に候、一言以て掩はる樂世的な

ありて佛家のいはゆる常見外道の樂世と、斷見を經由し斷常二見を空したる後の樂世とは、おのづから別に候、前者は無意識に只わけもなく此の世樂しと觀するもの、後者は此の世の外に淨土なく煩惱即菩提なるを意識して此の世を樂しとするものに候。元祿社會の樂世は固より前者にて、何の代の泰平か夫の齋々たる若生をして悉く悟後の樂世に達せしむるを得候はんや、此に於てか元祿の社會は動々もすれば平等の畏るべきを知らずして差別の一個に走るの病あり、悲劇の芽さす所此にありと存じ候、換言すれば、ひたすら差別界の歡樂を極めんとするが故に平等之れを責めて、尋ぐに哀傷を以てするもの、やがて元祿の心中悲劇に候。西鶴は實にかゝる社會を現實のままに描寫するに出で立ちしものにて深く此の奥に踏み入らんとはいたさざりきと存じ候、彼れは煩惱に狂せる人間が盲奔して遂に道義の大法に觸れて滅する次第を描くに能事了ると思置いたせしものに候、近松は時空を超して其の此の如くなる所以の真相を此の上に達觀いたせしなり。されば西鶴は元祿といへる一定の社會に實現したる人間を描き、近松は此の圍を取り除きたる人間を描けるものと申すべく、近松の寫せ

る所は直に不朽といふを得れど、西鶴は全部其のまゝを不朽といはんこと難く候。西鶴の人間観は元祿の社會を悉すも明治の社會とは全くかなはずといふ如きことあるべし、近松の人間観は元祿の現社會をも明治の現社會をも必然掩ひ盡すとは限られねど、また元祿も明治も彼れの格外には逸し得ざるもの候。時により處により西鶴に同感するを得ざるもあるべく馬琴に同感するを得ざるものもあるべし、而も何人か近松に同感し得ぬもの候はんや。序ながら近松の人間の情熱的なるを元祿の産物といふは異存なけれど、近松の心中物を直に元祿を描けるものといすが如きは淺膚の見たるを免れず候。近松の心中物出でて之に造られ感化せられし以後の社會は知らず、近松を造りし以前の社會は決して近松の心中物其儘の社會にあらざりし義と存じ候。勿論時に一二の近松のなる人物事件はありきといたさんも、大體は近松よりも寧ろ西鶴に似、道念と煩惱との衝突に苦みて自殺するよりも煩惱に驅られて盲進し自滅することこそ元祿社會全般の本調に候ひつらめ、これより近松に至らんには尙一際平等を柄馬たらしめ差別との權衡を保たしめざるべからず、近松の理想的なるは此のゆゑ

に候、西鶴の寫實的なる所以もまた此れにて明瞭と存じ候。以上西鶴の人間観の基く所を概説して近松の人間観と并ぶ論じれば、以下『五人女』の總評に移りてさらに事實の面より之れを明め申すべく候、而して、『五人女』中五の巻は好く描き、餘の四巻の壓巻は第三と存じ候へば之れを骨子といたして立言いたすべく候。『五人女』の飄刻者は『就中四の巻は西鶴作中屈指の文字、彼れを代表するに足る』と申し候へど、我等の見る所は然らず候。さて『五人女』は其の名の示せる如く、女主人公の悲劇にして、一の巻お夏清十郎、四の巻お七吉三郎は共に無分別なる若氣の戀、二の巻おせん長左衛門、三の巻おさん茂右衛門は共にや、差別つきたる年増婦人の戀にして、後の二者は何れも其戀の性質極めて複雑、眞箇千古の好詩題と見え申候。然るに西鶴は二の巻にては可惜筆を、そらして枝葉の事柄に巻の半をうづめ、要所をば巻尾にちらと敘述し去りたるに止まれば見るに足らず、眞に悲劇の面目を具へたるは三の巻のみと相成り申し候。又近松の筆に上りて『戀八卦柱磨』の名篇となりしも之れに候。そも、此の悲劇の主人公は如何なる人物にし

て其が戀愛は如何にして始まり如何にして終りしか。申す迄もなく西鶴にては茂右衛門は一の配色たるに過ぎず候へば、兩人の戀愛より其破滅に及ぶまで一切の動因はおさんに歸する義に候。而しておさん茂右衛門と全く意外の契を結び夢おどろきて「わけもなきことに心はづかしく成てよもや此の事人にしれざることあらじ此のうへは身をすて命かぎりになを立た茂右衛門と死出の旅路の道づれと尙やめがたく遂に邪鬼に迷ひ入りし刹那の心機こそ全運命の要にして如何様にも解せらるべき微妙の問題に候へ。稍々同輩ながらも二の巻おせんの戀は又別様の所ありて、おもへばく憎き心中とてもぬれたる扶なればこのうへは是非に及ばずあの長左衛門殿になさけをかけあんな女に鼻あかせんと思ひそめしより校別のごゝろさし程なく戀となりしものに候へば始はさらく長左衛門いととの愛着心より起れるに候はず、唯々我れに辛き女の鼻あけせんの面あて心、即ち意地、即ち戀と異方面なる一種の煩惱心、差別心より來れるものにて、終には必然之れに伴生すべき長左衛門への同感も交り眞の戀となりしものと存じ候、されば自然と才覺つき人たる人の娘はかくありたきものと褒められた

る發明女の、たゞ一筋に柔和なるのみにあらず、何處にか意地もありて申さば遊女氣質の幾分にもよるは、女房氣質の肉を被せたらんが如きおせんの性格もよく相見え申候。且つ此の何處にか遊女氣質の名残の尖せかぬるは西鶴が描ける女主人公の一貫の風格にしてまた元祿女の特質ならんかと存じ候。おさんにおありては其の心緒の複雑なることおせんの比にあらず、おさんが奇麗身を汚して今さら退きも進みもならぬ大窮地に陥れるあはれもきること候へど、彼れが心機窮まりて而して革まり、老陰再び陽に往きて正に背を決して天堂、地獄の岐頭に立てる一髮裡こそ千萬の人間觀を容れて餘あるの地ならめと存じ候。馬琴をして此の際に處せしめば如何、特別の事情なき限は彼れの人間は恐らくは直に刃に伏して心の潔白を證し候はん。近松をして此れに當らしめば如何、『戀八卦柱屠』は答へて申すらく、近松のおさんは流石にしかく單調子ならず、結ばれてなまなかつらき亂れ芋の解くに解かれぬ義理人情に縛られ夢にだに戀せぬ中の戀となり「ア、おろかしい事いふ人ぢや我れひとり生きながらへ言譯が立つほどなれば二人生きても同じ事とちがへようがどうしようが以春と云ふ男持ちながら其

方と肌ふれ寐たは定、かたちは生まれ替つても此の悪名は削られぬ」と自死の以て罪跡を清むるに足らざるを知るとともに、絶えず良心の呵責に苦むさまは表面に相見え候へど、紆餘曲折は之れに盡きず、さらに裏面に一大秘密の潜むもの候はざらんや、縦令身に恪氣といへる缺點ありきとは申せ、當初の心根は微塵曇のなかりしものを斯くまで酩酊周圍なか／＼に怨めしく心ともなく振りかへりて茂兵衛の方を見れば這はそもいかに、おさんの胸底には實に夢にだに知らざりし一道の異光漏れ來て、兩人の行手を照すに似たり、あはれおさんが無意識的に茂兵衛に寄せし同感是由來遠かれど此に至りて形をなすまでに成長いたせしなり、而して成長いたせる同感に對する諸多の感情及び危背を避くる生類の本能と混じて一團となり、おさんを刺撃して茂兵衛と共に一往夢路を辿らしめ候ひぬ、即ち一方には我れを責むるの道念儼として存じ、他方には責めらるゝの煩惱我無意識裡に歸り以て『戀八卦柱屠』の悲劇を成せるものと存じ候。最後に西鶴のおさんは近松のとも異なり、近松にありては道念の手にさいなまれての飄落に候へど、西鶴にては濡れぬ前こそ露をも厭への意氣ほの見え道義世界に

絶望せし極終に「此のうへは身をすて命かぎり」に名を立てんと一直線に煩惱に走れるおもむき有之候。斯くなるには自暴自棄の底に既に知らず／＼の戀の萌芽も溜みしか、其處までは今は研究いたさざるも、自暴自棄に流れ易き性格より察するも西鶴が人間を觀する本意は大抵相知れ申候。彼れに取りては道念の羈は以て狂へる意馬を制するに足らず、隙だにあらば蕪地煩惱に馳せんとするを人間の本相とせるものに候、されば西鶴は毎々人間を惡しく卑しき方より觀するの風あり、石山寺の開帳に都の袖をつらぬるは「どれがひとりに後世わきまへてまうでけるとは見えざりき皆衣裳くらべの姿自慢此の心さし觀音さまもをかしかるべし」と笑ひ、尾上の櫻吹く頃は「人の妻の様子自慢、色ある娘は母の親ひけらかして花は見すに見られに行くは今の世の人心なり」と嘲り、なべての世のさまを觀ては「人はみなうつり氣なる物ぞかし」一切の女うつり氣にして「など罵れるたぐひ皆之れより割り出せるもの候。さはいへ理想の歡樂郷にあらざる限は人生は哀傷は逃れぬものに候へば、西鶴の描ける人間とて固より煩惱一偏なるを得ず。其の頃おさんも茂右衛門つれてみ寺にまゐ

り、花はいのちにたとへて何時散るべきも定めがたし、此浦山を又見る事の知れざれば、今日のおもひ出にと、勢田より手づり舟をかりて、長橋の頼をかけても、短きは我々がたのしびと、浪は枕のこの山、あらはるゝまでの亂髪、もの思ひせし顔はせを鏡の山も曇る世に、鰐の御崎の逃れがたき、堅田の舟よばひも若しやは京よりの追手かと心たまふ沈みて、ながらへて長柄山我が年のほども此處にたとへて、都の富士二十にもたらずして頓て消ゆべき雪ならばと幾たび袖をぬらし、志賀の都はむかし語と我もなるべき身の果ごと一しほに悲しく、蒲灯のあがるとき白髭の宮所につきて神いのるにぞいと身の上はかなし、兎角世にながらへる程つれなき事こそまされ、此の湖に身を投げて長く佛國のかたらひ。

といひ切戸の文珠堂につやしてまどろみしに夜半ともおもふ時あらたに靈夢あり、汝等世になきいたづらして何國までか其の難をのがれがたしされどもかへらぬ昔なり向後浮世の姿をやめて惜きとおもふ黒髪を切り出の家となり二人わかれくに住みて悪心去つて菩提の道に入らば人も命を助けべしとありがたき夢心。

といへる、又はや、首尾透徹の致を缺けども末章茂右衛門が心の上の悲劇に筆を移せるくだり、茂右衛門が案内知りたる京の町の忍びあるきにも十七夜の影法師に胸をひやし、雑談の立聞に身をふるはし、おさんの舊夫を一目見るや、たましひ消えて地獄の上の一足飛び玉なる汗をかきて木戸口にかけ出づるなど何れか緒に觸れて閃爍する道念の光に候はざらん、されど刈り盡さざる雜草は茂り易く、間もなく煩惱の蔭さしてくらぶ山もとの開路を復たたどり、そめ最後の淵に急ぐばかりに候。五百兩の金子を持ち出して家を走りしにもくより、入水と見せかけて身を逃れ愈々罪科を重ねて顧みず「うれしや命にかへての男ぢやもの」といふにいたりて全然不義煩惱の犬となり了れる箇のおさんは最近松の描かんとして描くに忍びざる所、馬琴の夢にだも想像し得ざる所に候はずや、取りわけ文珠堂の靈夢はやがて我が道念の影なるに之れに對して、

何にならうともかまはしやるな、こちや之れが好きにて身にかへての脇心文珠さま

は衆道ばかりの御合點、女道は曾てしろしめさるまじといふかと思へば嫌な夢さめて橋立の松の風ふけば塵の世ぢやものとなほなほやむ事のなかりし。

といへる煩惱心の強梁なる、此の一節にて西鶴の人間觀を悉すに足らんと存じ候。「粟田口の露草とはなりぬ九月二十二日の曙の夢さらく、最期いやしからず世話とはなりぬ今も淺黄の小袖の面かげ見るやうに名は残りし」と西鶴の筆はうつくしけれど、おさん茂右衛門が最期決して潔しとは申されず、之れも煩惱が我の是非なしと申さん。要するに西鶴が一代の述作は一面に武士氣質、好色氣質、商人氣質のさまぐを寫しておのづから其の骨髄となれる一道の氣魄を髣髴せしめぬ、大和魂とは之れに候べし。而して他面には元祿を寫實して其の奥に伏する煩惱狂の人間を描き候ひぬ。右に日本左に元祿の人間を束ねし西鶴が手腕亦巨ならずと申さんや。最近松の世話物は乃ち元祿を門として概に不朽の堂奥に運れるものと申すべく、之れに時代物を并べ觀るときは、最近松の手には右に不朽の人間宿り左に日本國民藏れぬと見え申候。ついでながら申上ぐべきは最近松を理想的と申すに疑を扱むものあるこ

とに候、此は恐らくは理想の本義を解せざるに由り候はんか。近松は實よりも眞を理想とせるが故に其の作厭世樂世の二端を絶して孰れにも近つぎぬ、これ理想の本義に候はん。天地の眞は本来無邊なり、其の定着せる意味はカントのいはゆる意志と申す一形式の外説明すべからず、説明すべきものは既に實にして眞に候はず、西鶴は固より意識して理想せんとせざりしが故に、此に論ずる限に候はねど、かの馬琴の反駁を觀じて煩惱は何時も道念の下には屈し易きものとせるが如きは理想の小なるもの、其れ唯小なるがゆゑに樂世とか厭世とか黒とか白とか説明するを得る義に候、近松の厭世黒白の矛盾を包蔵して場合により何れとも見らるべき所殆ど無理想に似たるは其の大に理想的なる所以に候はずや。尙近松の論は盡きねど他日に譲り申し候。

終りに拵ひて申上ぐべきは西鶴が神佛不思議に對する觀念の著く現世的人間のなりしことに候、之れはた復れの人間觀の自然の結果に候はんか。西鶴は不思議を寫せども心より之れを信じたるものとは見えず、隨うて神佛と申すも神々しき所なく其の言ふ所は皆西鶴自身の語氣にして前に與けたる文殊の告の外

老翁枕神に立たせ給ひあらたなる御告なり、汝我が言ふことを善く聞くべし、總じて世間の人、身のかなしき時いたつて無理なる願、此の明神がまよにもならぬなり、俄に福徳をいのり、人の女をしのび、悪き者を取り殺しての、降る雨を日和にしたいの、生れつきたる眞を高うしてほしいのと、さま／＼のおもひ事、とても叶はぬに無用の佛神を祈り、厄介をかける、過にし祭にも參詣のともがら一萬八千十六人、いづれにても大欲に身のうへを祈らざるはなし、聞いてをかしけれど散錢投げがうれしく、神の役に聞くなり、此のまゐりの中に只一人信心の者あり、高砂の炭屋の少女、何心もなく足手見災にて又まゐりましょと拜みて立ちしが、小戻りして、私もよき男を持たして下さりませと申す、其れは出雲の大社を頼め、こちは知らぬ事と云うたれども得聞かずに下向しけり、その方も親見次第に男を持たれば別の事もなほ、色を好みて其の身もかゝる迷惑なるぞ、汝をしまぬ命はながく、命ををしむ清十郎は頓て最期ぞとあり／＼との夢かなしく云々。

といへるなど、粹なる親命の口小言とも聞え

て可笑しく候。何れの世にか折かる道化たる神佛のましまさんや。或はまた此等の神佛の、作者の化現とも見ゆると共に、之れに出會へる人物の心とも見らるゝより考ふれば、穿ち過ぎたる説かは存せねど、西鶴は一切の神佛不思議を主觀的のものとし、我れの心の影と解釋せるにあらざるか。『一代女』夜後附摩の章に、

一生の間さま／＼のたはぶれせしを思ひ出して觀念の念より覗けば、蓮の葉笠を着たるやうなる子供の面かけ腰より下は血に染みて九十五六ほど立ちならび、聲のあやぎれもなく負りよ／＼と泣きぬ、是れかや聞きつたへし孕女なるべしと氣を留めて見しうちに、むごいか／＼とめい／＼に恨み申すにぞ、扱ては昔血荒をせし親なし子かと悲し、無事に育て見ば和田の一門より多くて目出たかるべきものをと過ぎし事ども懐かし、しばらくあつて消えて跡はなかりき、是れを見るにいよ／＼世を限とおもひしに、其の夜明ければ、つれなや命の捨てがたく思はれし。

といへるは何等凄涼の筆に候ぞ、今日の知識より見るも儼に幽を聞くの文字と申すべし。更に『總じて五百の佛を心靜に見とめしに皆々

逢馴れし人の姿に思ひあたらぬは一人もなしといへる「皆思謂五百羅漢」の條は「一代女」の掉尾の絶唱、此等に見ば思半に過ぐるもの候はん。

西鶴の文章と、西鶴の人生觀に關係ある滑稽諷刺とは他日別に一題として論ずるの價値あるべければ此には省き候。たゞ彼れの小説家としての技藝につきては到底幼稚と斷ぜざるを得ず、人物の主宰を轉倒し記事の繁簡を亂し、意匠脚色の單純に失する等、今日より言へば未だ小説の形を成さずと申すべし。西鶴に取る所は其の人間觀の深刻にして、衣を剥ぎ皮を剥ぎたる元祿の煩惱社會を忌憚なく活寫せる點に御座候、是れのみにて西鶴は近松馬琴と并べ論ずるの價値十分と存じ候勿々不宣。

(明治二十八年)

眞我

人間は自ら飾り偽る動物である。眞我に達するの困難は、必ずしも無我に達する困難に劣るものでない。切に眞我の人を想望する。冷氣ある個人、温氣ある個人、熱氣ある個人、要するに夫が眞實でさへあれば、何れでもよい。困難は其の冷を冷とし、温を温とし、熱を熱として傳へる點にある。熱を以て冷を議し、冷を以て熱を議する謂れは無い。

今日(今日)の如き時世にあつては、百人寄れば百個格別の世界である。共通同感の頼みは如何にも果敢ない。各人はたゞ黙々として其の行かんとする所に行く外はない。我等が思議言説の底には、たゞ黙の一字があるのみだ。それをお互に斯うして口を動かさし筆を動かさすといふのは、多分に外から強ひられる結果である。苦しいながらに絞り出す叫聲に外ならない。

植木屋

植木屋といふものはよく煙草を吹かして休むものだ。庭でも造らうとすると、二三十分もそこらの石や木をいぢくつて居るかと思ふと、軒先に腰を叩して、衝へ煙管をしながら、ぼかんとして庭を眺めてゐる。半時間でも一時間でも眺めて居る。併しあれが庭造りの人生である。石を動かしたり土を返したりして

居る忙し間が彼等の實行の世界で、衝へ煙管でさきも閉さうに見える間、頭の中が彼等の宗教であり、哲學であり、文藝である。茲に人生の縮圖があると見れば、面白いではないか。

眞の生活

次の一年のあひだ、私は如何なる瞬間に於いて、眞の生活を體驗する機會に出會ふであらうか。一毫の見えも無い、偽りも無い、恐れも、遠慮も、無理な緊張も、だらけた單調も無い、大地から生えぬいたやうな生活に、大膽な満足な味ふ機會がせめて、瞬間たりとも幾たびあり得るであらうか。我々は之に溺して居る。

生命

眞と妄、美と醜は、共にたゞ有と無、生と死、の別名である。生命のシムボルは美となり、死のシムボルは醜となる。生命を味はんとする心が、美の要求である。

(題言「上」)